

音楽学習学会

第19回研究発表大会

2023年8月27日

関西学院大学

西宮上ヶ原キャンパス

～ 第 19 回研究発表大会 概要 ～

期日：2023年8月27日（日曜日）

会場：関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス H号館

（最寄り駅：阪急電鉄今津線「甲東園駅」バス約5分、「仁川駅」徒歩12分）

大会スケジュール

09:30～10:00	受付 H号館3F	(301教室前)
10:00～10:10	開会挨拶	(301教室)
10:10～12:00	大会講演	(301教室)
12:00～13:00	休憩	
13:00～13:30	2023年度総会	(301教室)
13:45～17:00	研究発表	(A～D各会場)

参加費： 正会員・非会員一般：¥3,000, 学生・非会員学生：¥2,000

情報交換会（懇親会）： 今大会では、情報交換会（懇親会）を計画しています。
詳細はHPでのご案内・受付にて。

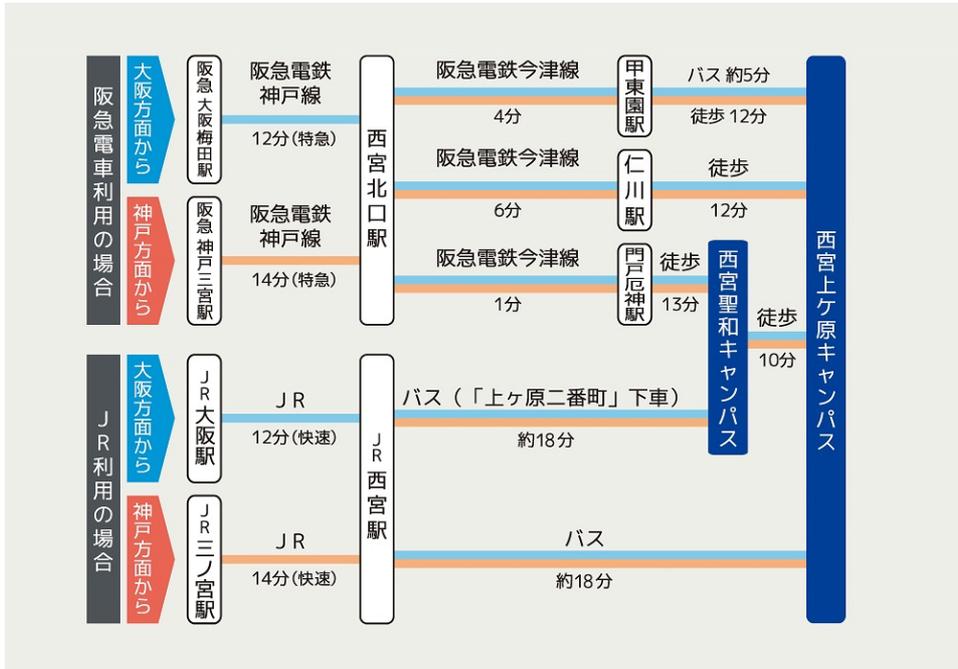
※ 昼食は、各時ご用意ください。会場周辺には飲食店はありません。
コンビニエンスストアは会場正門から100mほど離れたところにあります。

会場案内

関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

アクセス案内



関西学院大学 上ヶ原キャンパス案内図



会場・アクセス図等は、関西学院大学の公式HPを元に作成しています。HPのご案内をあわせて、ご確認ください。

<https://www.kwansei.ac.jp/index.html>

※ 建替えにより、H号館の位置と形状が、上図とは若干異なることがあります。場所の目安としてご参照ください。

会場図 (H号館3階平面図)

3階



※ 301 教室前の廊下に受付を設置の予定です。

※ 301教室は休憩・談話室としてご利用いただけます。

プログラム

全大会：講演（10:10～12:00） H号館 301 教室

「太鼓文化の担い手たち一部落史の新たな視座」

講師：太田 恭治 氏（あとりえ西濱 代表）

今回は、日本の音楽文化のひとつである和太鼓、なかでも、その作り手である太鼓職人に目を向けます。太鼓作りの歴史には、定まったものはありません。縄文期、ツボに皮をかぶせたモノがあったとされていますが、文献資料はありません。唯一の手掛かりは太鼓胴の中に刻まれた職人さんの銘と製作年です。胴の中の記録は太鼓の歴史そのものです。

また、太鼓作りの歴史は部落史研究の角度からも整理する必要があります。1970年代に始まった和太鼓演奏ブームを支えたのも部落の太鼓屋でした。

当日は「皮から革へ」「弊牛馬処理権と皮作の伝統」「太鼓の音の正体は？」「和太鼓ブームの仕掛け人」「和太鼓は楽器なのか道具なのか？」などに加え、「太鼓の音はどのように決まるのか？」など、職人さんたちの語りから太鼓の音の魅力についてもお話をいただきます。

講師プロフィール：兵庫県出身。元大阪人権博物館学芸員。現在「あとりえ西濱」代表。

主な著作

「太鼓の胴から見える部落史」『太鼓の履歴書・胴内銘文報告』解放出版社編，2019年

：服部英雄編著 地域資料叢書 16.

「四世鶴屋南北が描いた被差別民」『人権教育研究 24』花園大学人権教育センター，2016年.

「一茶が描いた被差別民(1)」『かわた・長吏』について『人権教育研究 21』花園大学人権教育センター，2013年.

「万歳師嘉四郎の近世」『大阪人権博物館紀要 10』大阪人権博物館編，2003年.

「戦前における『破戒』映画化の試み」『大阪人権博物館紀要 2』大阪人権博物館編，2003年.
など

司会：城 佳世（九州女子大学）

2023 年度総会（13:00~13:30） H号館301教室

2023 年度 総会次第

- 議長選出

議題

1. 2022年度事業報告
2. 2022 年度決算報告
3. 2023 年度事業計画
4. 2023 年度予算案
5. 会則等の改定
6. 会計幹事の選任

報告事項

1. 学会誌編集方針について
2. その他

※ 総会をご欠席の場合は、あらかじめ学会 HP 内「大会出欠確認」より、総会委任状へのチェック入力にご協力をお願いいたします。

研究発表 13:45~17:00 (A~D 会場)

研究発表会場 A (H 号館 302 教室)

座長: 森 薫 (埼玉大学)

1. 批評の評価方法 —分析から批評へ—
上野学園大学短期大学部 内田 有一
2. 小中学校向けの学校合唱曲の歌詞源流に関する考察
—NHK「みんなのうた」楽曲歌詞との比較分析—
鹿児島女子短期大学 佐藤 慶治
3. 「郷土の音楽」「郷土の伝統音楽」の学習指導の実態
—全国の小中学校への調査を通して—
九州女子大学 城 佳世
4. 中学校音楽科の鑑賞授業におけるメタ認知
—他の生徒の意見をもとにしたメタ認知に着目して—
広島大学大学院 田口 有志
5. 音楽科授業での教材選択にみる教師の教育観や教材観 —教師へのインタビューを中心に—
広島大学大学院 脇田 小百合

研究発表会場 B (H 号館 303 教室)

座長: 津田正之 (国立音楽大学)

1. 音楽学習における「オーナーシップ」に関する検討 —「真正の学び」を実現するために—
埼玉大学教職大学院 上原 美宮
2. 児童の音楽科における苦手意識・課題を教師はどう捉えているか
—『教育音楽 小学版』における語り・記述の分析を通じて—
埼玉大学教職大学院 大戸 遥香
3. 石井漠の「子どもの舞踊」の振付の特徴 —実際の身体表現の分析を中心に—
エリザベト音楽大学大学院 沖中 春志郎
4. 公立高等女学校本科における音楽科教育
—明治期に東京市で開校した3校の事例の検討—
実践女子大学 越山 沙千子
5. 音楽科教員養成課程にいながら他教科の免許を取得したことの意味
広島大学大学院 武島 千明
広島大学大学院/日本学術振興会 特別研究員(DC1) 吉田 純太郎
広島大学大学院 嶋田 亘佑

研究発表会場 C (H 号館 304 教室)

座長:三国 和子(名寄市立大学)

1. ペンタトニック音階を用いた従来型の創作と音楽制作ソフトを用いた創作の比較検討
梶山女学園大学大学院 浅井 柚衣
梶山女学園大学研究生 山上 京夏
梶山女学園大学教育学部 鈴木 あいり
梶山女学園大学 山中文
2. 広島大学におけるオペラ制作に携わる学習者の学びの拡大
—教育現場でのアウトリーチコンサートの企画・演奏をとおして—
広島大学 大野内 愛
伊藤 真
枝川 一也
3. 小学校の音楽クラブにおける楽曲選択に関わるネットワークの考察
新潟大学 工藤 千晶
4. 小学校音楽科授業におけるアウトリーチのあり方 —教員と演奏者の協働に着目して—
広島大学大学院 平 幸音
5. 大陸間 SDGs教育「地球こども広場」における協働を促す音楽活動
梶山女学園大学教育学部 渡邊 康

研究発表会場 D (H 号館 305 教室)

座長 : 門脇 早穂子 (兵庫教育大学)

1. 教員養成課程における協調学習志向のピアノ実践への展開
—初学者段階の基礎技能習得プロセスと課題の検討—
柴田学園大学 一戸 智之
2. 視線情報と打鍵情報から分析する大学生の演奏ミスについて
—ピアノ演奏における高齢者との比較—
京都ノートルダム女子大学 古庵 晶子
公立ほこだて未来大学 竹川 佳成
公立ほこだて未来大学大学院 能登 楓
3. 即興表現を促す幼児の音楽活動のプロセス
就実大学 小林 佐知子
4. 保育者養成におけるリトミック指導の内容—理論と実践の配分に着目して—
茨城キリスト教大学 佐藤 真紀
5. 保育者養成校に於ける「弾き歌い」に重点化した指導に関する一考察
千葉敬愛短期大学 股木 裕美子
6. 手指に不具合がある成人のピアノ学習 —より有効な練習法の開発のために—
大人のピアノ研究会 三上 香子

研究発表要旨

研究発表 A 302教室	pp. 9-13
研究発表 B 303教室	pp.14-18
研究発表 C 304教室	pp.19-23
研究発表 D 305教室	pp.24-29

発表要領

- 発表 : 20 分間, 質疑応答 : 5分間, 発表者交替・準備 : 5分間
円滑な進行にご協力お願いいたします。
- 会場には, PC 用のプロジェクター, スクリーン, 音声のスピーカー出力の
準備があります。PCと会場機器の接続はHDMI端子となります。
- 機種それぞれに異なる接続アダプター等は, 発表者ご自身でご準備下さい。
また, 昼休みの時間に, 各会場にて機器の動作確認を願います。
- 当日の配付資料がある場合は, あらかじめ印刷の上, ご持参下さい (例
年, 多くて1発表につき 30部程度です) 。

批評の評価方法 ー分析から批評へー

上野学園大学短期大学部 内田 有一

本研究は、鑑賞において「知覚したことと感受したこととの関りについて考え」を思考1、「曲や演奏に対する評価とその根拠について考え」を思考2とし、鑑賞における知識、思考・判断・表現について、批評の評価方法を提案するものである。

音楽を知覚・認知すると情動が喚起される。「知覚と感受」は、認知心理学における「認知と情動」と重なる用語とされている（坂井、2016）。例えば悲しい曲想とその曲想から喚起される感情は、認知心理学においてどちらも情動のカテゴリーである（星野、2022）。音楽の諸要素の知覚は客観的であるが、感情やイメージを伴う感受は主観的である。客観的な音楽の諸要素の知覚は教育の対象であるが、感情という心の動きは教育で制御するものでないため、感情が伴う感受のみは教育の対象にならない。坂井はいう。「音楽の感受は、知覚を通したロジックに支えられている」、「教科の内容とは、そのロジックである」としている。そして「授業は知覚をクリアにし、ロジックを見出す思考の場として構想しよう。」としている（坂井、2016）。知覚したことと感受したこととの関りはロジックであるため教育の対象になる。そこで音楽の鑑賞は、音楽の諸要素の知覚による分析により、音楽の構造を解き明かしていくことを主とする。その際、児童生徒は感受を必ずしているが言語化は求めない。それは次の問題点があるからである。山下は知覚と感受にかかわる授業の問題点として「要素の働きを1対1で結びつけすぎている」、「要素の働きがパターン化されすぎている」、「楽曲全体を味わうことが疎かになっている」という3点を指摘している（山下、2016）。音楽の諸要素の知覚では[共通事項]を用いるため、学習者は音楽の諸要素の働きを言語表現することが容易である。しかし感受したことの言語化は、学習者個々の語彙力に依存するため、表現できない学習者が多い。前述の問題点は、学習の段階で思考1、思考2について指導者が感受の言語化をいちいち求めることが要因であると考えられる。つまり知覚と感受の関りについての発表やワークシートに記述する活動が多すぎるため、学習に無理が生じていることを示している。

そこで国語科における論理的な文章の書き方を活用した批評の方法を創出した。批評活動を通して児童生徒は、知覚したことと感受したこととの関りを整理する。その段階で児童生徒は個々の語彙を用いて感受したことを記述し、批評を書くことができる。この批評は思考1、思考2、知識を可視化できるため指導者が明確な根拠をもって評価することができる。以上の方法により授業実践を行い、「小中一貫鑑賞の授業における評価方法の手引き」を創出した。当日は、その具体を示し、批評の評価方法を提案する。

坂井恵「音楽授業における『知覚と感受』の考え方」季刊音楽鑑賞教育 Vol.25、2016 音楽鑑賞振興財団
星野悦子「音楽心理学の研究動向」音楽教育学 51 (2)、36-46、2022 日本音楽教育学会

山下薫子「知覚と感受の先にあるものを見据えて」季刊音楽鑑賞教育 Vol.25、2016 音楽鑑賞振興財団

小中学校向けの学校合唱曲の歌詞源流に関する考察 －NHK「みんなのうた」楽曲歌詞との比較分析－

鹿児島女子短期大学・佐藤慶治

本研究においては、1980年代～2000年代に作曲された学校教育向けの合唱曲を対象とし、主に校内合唱コンクール等でレパートリーとなっている楽曲の歌詞について分析を行った上で、その源流を探る。学校教育向けの合唱曲については、《旅立ちの日に》や《コスモス》等、コミック等のメディア媒体に登場するほど知名度の高いものも多く、また音楽之友社刊行の教育誌等で人気ランキングが掲載されるなど、音楽ジャンルのうちのジャンルを占めているといえる。これらの楽曲は教育向けということで、歌詞に使用される単語に共通点があるという指摘もあるが、その点を俯瞰して考察した研究はこれまであまり見られない。

佐藤はこれまで特に「みんなのうた」を中心としたNHK教育音楽番組の研究を行ってきたが、その中で1960年代～1970年代の「みんなのうた」楽曲歌詞に関する分析も扱っており、更には前述の学校教育向け合唱曲歌詞との共通点を示唆してきた(日本比較文化学会第32回九州支部大会「NHK教育音楽番組『みんなのうた』の楽曲歌詞成立とその影響についての考察」等)。今回の研究においては、音楽之友社および教育芸術社が刊行する複数の学校合唱曲集に掲載の合唱曲について、1960年代～1970年代の「みんなのうた」楽曲歌詞との比較分析を行い、単語レベルでの共通性を探っていきたい。

なお本研究においては、繁下和雄による「現代の歌とことば--『みんなのうた』のことば」(短歌研38(6), pp.42-46.)等の先行研究や、NHKが各年代の「みんなのうた」歌詞をAI分析した番組「AIでせまる!『みんなのうた60』とっておき思い出スペシャル!」等の分析結果を参考にした上で、更に佐藤がテキストマイニングによって、前述の学校合唱曲についての歌詞分析を行った結果を用いたい。

「郷土の音楽」「郷土の伝統音楽」の学習指導の実態

—全国の小中学校への調査を通して—

九州女子大学・城佳世

「郷土の音楽」という文言は、昭和33年版学習指導要領にはじめて登場した。以降、平成29年版の学習指導要領にいたるまで、「郷土の音楽」「郷土の民謡」「郷土の伝統音楽」など、「郷土」という言葉は学習指導要領の改訂とともに、さまざまにもちいられてきた。特に平成20年学習指導要領においては「我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする」ことが改訂の趣旨として示された。その後、平成29年版学習指導要領においても、これら「郷土の音楽」「郷土の伝統音楽」の学習指導は重要視されている。

さて、「郷土」の文言について、昭和33年版の学習指導要領には「生徒の身近にある郷土の民謡」、昭和44年版には「自分の地方の民謡」、昭和52年版、平成元年版には「児童が生活している地域に今も息づいている音楽」、平成10年版には「児童に身近にあつてそれぞれの地域社会で親しまれている音楽」、平成20年版には「生活している地域で親しまれている郷土の音楽」、平成29年版では「生活している地域などで親しまれている郷土の音楽」などと表記されている。少しずつ表記は異なっているものの、学習指導要領における「郷土」の文言は一貫して「子どもの生活している地域」という限定的な範囲をさしてきたといえる。

ところで、平成29年版学習指導要領において「郷土」の語がもちいられているのは、道徳科及び音楽科のみである。中学校社会科に「郷土資料館などの施設を見学・調査」、小中学校の家庭科に「郷土料理を扱うことができる」の表記はあるが、いずれも内容の取扱いの項目であり、内容そのものではない。なお、社会科については、昭和33年版の学習指導要領までもちいられていた「郷土」の語が、昭和44年版以降「地域」にかわっている。この理由について、昭和45年版の『中学校指導書 社会編』には、「郷土という概念にはあいまいさがあり、その解釈と取り扱いに混乱がみられた」（文部省1970, 35-36）と書かれている。

また「郷土」の語について広辞苑では「生まれ育つたふるさと」と示されている。一方の「地域」は「区切られた土地」という意味である。すなわち、社会科に位置づけられているのは「日本の各地域の学習」ということになる。

それでは、音楽科の教員は「郷土」をどのようにとらえ、「郷土の音楽」「郷土の伝統音楽」の学習指導をどのようにおこなっているのだろうか。発表者は全国の小中学校1000校を対象にアンケート調査を実施した。その結果70%以上の教員が「教科書に掲載された全国の民謡や芸能」を「郷土の音楽」としてとらえ授業をおこなっていた。また、郷土の音楽の学習指導が不要と考える教員の多くは、時間数不足に加え「能や歌舞伎などの他の伝統音楽をあつかっているから」という回答が多くみられた。本研究では、アンケートの結果をふまえながら「郷土の音楽」について考察する。

科学研究費助成事業課題番号22K02848

中学校音楽科の鑑賞授業におけるメタ認知 —他の生徒の意見をもとにしたメタ認知に着目して—

広島大学大学院生・田口 有志

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編では、教科の目標において、音楽を愛好する心情を育むことや、音楽に親しんでいく態度を養うことが挙げられている。卒業後も生徒自身が自律的に音楽と関わるためには、自分自身がどのように考え、活動しているかを評価できることが重要であると考え。そこで筆者はメタ認知を活用した指導が効果的なのではないかと仮説を立てた。メタ認知とは、「自分自身の思考や認知についての思考」（Flavell, 1979）である。自分自身がどのように認知しているのかをモニタリングする活動は自己評価と同様のプロセスであり、指導に取り入れることで生徒のメタ認知能力、自己評価能力を育成することができるのではないだろうか。

日本の音楽科授業におけるメタ認知に関する研究では、中学校音楽科における歌唱・創作の授業が調査対象となっており、鑑賞授業に関する研究は行われていないため、鑑賞授業におけるメタ認知には研究の余地があると考え。これは日本の音楽科授業におけるメタ認知研究があまり行われていないことに加え、鑑賞授業において求められるスキルが明確でないことも背景にあると考えられる。メタ認知は「認知の対象が外界の情報ではなく自分や他者の認知であること、認知そのものの改善につながること」（三宮, 2008）が特徴であると言われている。歌唱や器楽などでは、生徒自身が正しい奏法や目指すべき演奏を比較的理解しており、改善が行いやすい一方で、鑑賞ではどのような「鑑賞」を目指すべきなのかが想像しにくい。このような鑑賞授業の特性を踏まえた上でどのように生徒のメタ認知を促していくかを提案する必要がある。

筆者は田口（2022）において、中学2年生の鑑賞授業における生徒と教師の発話を対象として調査を行い、鑑賞授業におけるメタ認知の実態把握を試みた。結果として、生徒のメタ認知を促すと考えられる教師の発話は見られたが、生徒の自律的なメタ認知は見られなかった。しかし、この調査では授業内の発話のみを分析対象としたため、発言に現れなかったメタ認知を見とれていない可能性がある。そこで本発表では、生徒が思考する場面や意見共有する場面を多く設けた鑑賞授業を対象として行った調査を取り上げ、鑑賞授業におけるメタ認知の実態把握を試みる。前回の調査では教材に関して「学ぶ」という側面が強く、生徒が考える場面が少なかったことや、他の生徒の意見に触れる場面は設定されていたものの、教師が意図するほど生徒間で意見共有が行われていなかったため、Jamboardや付箋を用いた活動など、異なる形態の活動を取り入れた授業で生徒がどのようにメタ認知を行ったかをみとる。また、今回の調査では授業内の発話に加え、ワークシート、振り返りForm、単元末の鑑賞文の記述を分析の対象とする。

引用・参考文献

- ・三宮真智子（2008）『メタ認知：学習を支える高次認知機能』北大路書房
- ・田口有志（2022）「中学校音楽科鑑賞授業における生徒のメタ認知的活動：授業内の発話に着目して」『教育学研究紀要（CD-ROM版）』第68巻，pp.602-607
- ・Flavell, J. H. (1979) Metacognition and Cognitive Monitoring A New Area of Cognitive-Developmental Inquiry, *American Psychologist*, Vol.34, No.10, pp.906-911

音楽科授業での教材選択にみる教師の教育観や教材観

－教師へのインタビューを中心に－

広島大学大学院・脇田 小百合

現在、音楽科の授業では、教科書や副教材が用いられている。杉江（2007）「教科「音楽」の授業内容と学力に関する調査（2006年9月実施）」より、教科書の使用程度について5段階でアンケート調査した結果、小学校・中学校ともに「ほぼ教科書に沿って教え、他の教材も少し用いている。（教科書使用率の目安 60～80%）」の場合が最多であることが明らかになった。また、小学校教師に比べて中学校教師の教科書使用率は低く、副教材を用いるケースが多いことが明らかになった。このことから、教師は教科書のみではなく、教科書以外の教材も用いていることがわかる。しかしながら、教師が授業で教材を活用する場合、学習効果を上げることを目的としながら、教師自身が過去に得た経験を基に特定の教材を選択して活用するなど、教材に関して教師の様々な捉え方が存在すると考えられる。

現在、音楽科における教材の捉え方は様々である。藤岡（1979）は、「教材とは、教育内容としての概念や法則などが形をとってあらわれたものとして授業過程のなかに導入される「事実、現象、素材」」（p. 272）と定義し、教材概念として実体的概念を主張する一方で、小笠原（2014）は、「「教材」とは、最初から実体としてあるのではなく、学習者とのかかわりとして、ダイナミックな働きとしてある」（p. 24）とし、機能的関係概念を主張している。本研究においては、教材を実体的概念から定義し、実体的概念における教材として、楽曲に着目するものとする。

本研究では、中学校音楽科担当教諭を対象に、年間指導計画を基に音楽科授業において教師が授業で具体的にどのような意図をもって教材を用いているのか、授業で教材を用いる際に何に重点を置いているのかなど、教材の使用に関する半構造化インタビュー調査を行う。インタビューでの発話内容は、後に、「教材を用いた際の経験→経験から生まれた考え」の発話内容を意味のまとまりに分節化し、その意味をコード化した後、カテゴリー化する。以上をもとに、教材選択から見る教育観や教材観を分析することで、教師による教材選択のあり様の一端を明らかにする。

【引用・参考文献】

- ・杉江淑子（2007）「教科「音楽」の授業内容と学力に関する調査」教師調査班調査報告書，pp. 1-61
- ・小笠原喜康（2014）「機能的関係概念としての「教材」－実体から機能的関係へ－」『教材学研究』第25巻，pp. 15-26
- ・藤岡信勝（1979）「教材構成の理論と方法」『教材学講座7 教育課程の理論と構造』学習研究社，pp. 268-291

音楽学習における「オーナーシップ」に関する検討 －「真正の学び」を実現するために－

埼玉大学教職大学院生・上原美宮

日本の学校教育では現在、「主体的・対話的で深い学び」によって、子どもたちが学習内容を自らの人生や社会のあり方と結び付けて深く理解し、生涯にわたり能動的に学び続けること（中央教育審議会，2016）が求められている。そのような学びを中学校音楽科で実現することを念頭に、本研究では音楽教育学分野で学習や音楽の真正性を決める要素の1つとして着目されるようになった、「オーナーシップ(ownership)」概念に関する諸論を整理・検討し、示唆を得ることを目的とした。なお、“ownership”とは一般的に「所有者であること；所有；所有権」（ジーニアス英和辞典，第4版，p.1399）という意味である。本研究ではオーナーシップが保障され、またオーナーシップが育まれる授業が、主体性や真正性を伴う授業であるという立場をとる。

ハーグリーヴズ他(Hargreaves et al., 2003)は、発達心理学の諸論を検討しつつ、幼児が日常生活で出会う様々な人々との相互作用によって音楽的アイデンティティが形成され、統合されると述べた。彼らは、音楽科授業で音楽的アイデンティティを育てることを強調したが、その手立てとして自立性や高レベルのコントロールを伴って関わる音楽である「学校外の音楽」に着目した。ハーグリーヴズ他は、これをオーナーシップのある音楽であると述べている。オーナーシップのある「学校外の音楽」を教材化することで、オーナーシップを担保した音楽科授業が実現し、それが生徒の音楽的アイデンティティの構築に繋がると考えていることがいえる。

フィスケ(Fiske.H., 2012)は、認知研究の諸論をもとに、音楽に関するオーナーシップについて、「認知的能力や感情的反応、心と体が連動したパフォーマンスを同時に包含する、理解の感覚」(Fiske.H., 2012, p.323)と説明し、それはアイデンティティとも呼ばれるとも述べた。そのような「オーナーシップ」「理解の感覚」「音楽的理解」は、「能動的でアクセス意識のレベルにある学習者中心のプロセスによって生起する」(Fiske.H., 2012, p.324)と述べた。そして学習者に音楽についての情報を提供する授業ではなく、学習者が音楽経験に没頭するような授業を効果的であるとした。フィスケのオーナーシップ概念は、「音楽的理解」の意味で使われており、その理解を育てるために学習者の没頭が必要であるとされている。

オーナーシップに関する諸論の検討の結果、ハーグリーヴズ他の場合は、音楽的アイデンティティの構築に必要な要素として、音楽に対するオーナーシップを位置づけているといえる。一方フィスケにおいては、オーナーシップを「理解の感覚」と説明していた。あわせて、オーナーシップと音楽的アイデンティティ、音楽的理解などの近接概念との布置関係を分析する必要性が明らかとなった。

主要引用・参考文献

- Fiske, Harold. (2012) Engaging Student Ownership of Musical Ideas. *The Oxford Handbook of Philosophy in Music Education*, pp.307-327
- Hargreaves, David J., & Marshall, Nigel A. (2003) Developing identities in music education. *Music Education Research*, 5(3), pp.263-273

児童の音楽科における苦手意識・課題を教師はどう捉えているか — 『教育音楽 小学版』における語り・記述の分析を通じて —

埼玉大学教職大学院 大戸遥香

現行の小学校学習指導要領音楽科の小目標(3)では「音楽を愛好する心情」が示されている。しかし、ベネッセ総合研究所(2015)の調査では11.4%の児童が音楽科を「まあ嫌い」「嫌い」と答えており、これは実技教科(音楽、図画工作、体育、家庭)の中で最も高い数値となっている。このことから、音楽科に苦手意識を感じている児童に対し、より注意深く目を向ける必要があると考える。また、令和の日本型学校教育では、個別最適な学びが求められており、学習へのつまづきや苦手を感じている子どもたちに、どのような指導や支援を行うべきかが教科を問わず課題となっている。そこで、本研究では、児童が抱く音楽科における苦手意識や課題を教師はどう認識しているのか、各領域の苦手意識や課題の認識にはどんな特徴がみられるのかについて明らかにすることを目的とした。

方法としては、雑誌『教育音楽 小学版』2011年4月号～2022年12月号(音楽之友社)の計141号を対象とし、教師が認識する児童の音楽科授業への苦手意識や、児童の抱える課題についての語り・記述を抽出した。次にそれらの語り・記述が「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「鑑賞」「〔共通事項〕」「全体」のいずれについてのものであるかを検討し、6分類した。さらに、その結果に対しKHcoderを用いた対応分析を行い、構造化した。

結果として、該当する語り・記述は全部で448件抽出され、歌唱が226件、器楽が85件、音楽づくりが25件、鑑賞が22件、〔共通事項〕が46件、全体が55件に分類された。抽出された語り・記述と上記6分類との対応分析を行った結果、明らかになったことのうち2点を以下に示す。

1 点目に、表現領域における児童の苦手に対する教師の認識は、技能面に偏っていた。特に歌唱や器楽において、音を出すことや運指といった技能に関わる語が特徴的に表れていた。一方で、知識に関わる語は音楽づくりを含むすべての表現領域で表れていなかった。このことから、教師は児童の苦手を認識する際に、技能に関する苦手に目を向けがちであり、知識に関する苦手を見逃している可能性があるといえる。そこから、表現領域において知識が技能に比べ、重視されていない可能性も示唆される。

2 点目は、読譜ができないことが児童に苦手意識を持たせる大きな要因と考えられているということである。対応分析の結果、〔共通事項〕において読譜に関する語が特徴的であった。教師は児童が五線譜の楽譜を読むことや、音符や休符、記号や用語に苦手を感じていると認識していることがいえる。

今回は雑誌『教育音楽 小学版』を用いて、児童の音楽科授業への苦手や課題に対する教師の認識を明らかにした。今後の課題として、児童が抱える音楽科授業に対する苦手意識や課題についての実態を調べていく必要があると考える。具体的には、児童の観察やインタビュー調査を通して、学年ごとの苦手意識の変容や、音楽科の各領域のどういった部分に苦手を感じやすいのかを明らかにしていきたい。

【主要引用・参考文献】ベネッセ(2015)「第5回学習基本調査」基礎集計表,ベネッセ教育総合研究所

石井漠の「子どもの舞踊」の振付の特徴 —実際の身体表現の分析を中心に—

エリザベト音楽大学 大学院生・沖中春志郎

石井漠（1886-1962 以下、石井）は、日本のモダンダンスの先覚者であり、彼の振付作品は、現在においても再演が繰り返されている。それは、石井の創作舞踊だけでなく、1934年から1937年前後に振り付けられた、子どものための「子どもの舞踊」も例外ではない。本研究は、現在においても再演されている理由を教育的価値があるからだと仮定し、「子どもの舞踊」の振付分析を中心に、石井漠の「子どもの舞踊」の振付の特徴を明らかにすることを目的とする。

筆者はこれまでに、石井の「舞踊教育」の特徴は、「自然運動の模倣」からはじまり、その「自然運動の模倣」を作品とする「子どもの舞踊」があり、さらなる舞踊訓練のための「基礎的修練」があることを明らかにした。また、「自然運動の模倣」から「基礎的修練」までの流れに着目した場合、学年や年齢の縛りは考え辛く、子ども（学習者）の心持ちに合ったリズム運動であることが重要なのであることもあわせて明らかにした。

先行研究を検討する上で、実際に振付分析をしている研究に絞って調査した結果、小栗（2010）のみであった。小栗は、修士論文「『キンダーブック』に見られる身体表現：付録『ツバメノオウチ』（1932-1927・1950-1956）を中心に」において、幼稚園教育雑誌『キンダーブック』の付録『ツバメノオウチ』に見られる身体表現（舞踊教育）について研究した。小栗は、石井の振付の特徴を、歌詞のイメージを「ステップ」や「ジャンプ」を伴う動きに抽象化し、振り付けられていることと述べている（小栗 2010）。しかし、小栗（2010）は、『ツバメノオウチ』全般であったため、石井の「子どもの舞踊」を網羅できたと考えづらい。

本研究の方法は、筆者自身が「子どもの舞踊」の童謡を音源化し、振付ページから舞踊を読み取り、踊ったものを分析する。それによって、歌詞や音楽と振付の繋がりを検討したい。

石井の『子供の舞踊』（石井 1936）は、歌詞を手掛かりに付けられた模倣とリズム運動を基盤とした振り付けがなされ、まさに自然な身体表現を実現しようとしていた。あわせて、石井の芸術観を織り交ぜることで、石井式の舞踊教育を打ち出そうとしていたことがわかる。この石井独自の舞踊の芸術性と、音楽を感じるリズム運動性が、石井の「子どもの舞踊」の特徴である。

【引用・参考文献】

石井漠（1936）『子供の舞踊』フレーベル館 / 上笙一郎、富田博之編（1988）『児童文化叢書 30 第Ⅲ期』大空社。

小栗百子（2010）「『キンダーブック』に見られる身体表現：付録『ツバメノオウチ』（1932-1927・1950-1956）を中心に」お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻 舞踊表現行動学コース 修士論文。

公立高等女学校本科における音楽科教育 —明治期に東京市で開校した3校の事例の検討—

実践女子大学・越山沙千子

高等女学校は、明治期から戦後の学制改革まで存在した、女子の中等教育機関である。男子の中等教育機関であった中学校や、初等教育の学科目は、昭和初期まで「唱歌」であったのに対し、高等女学校の学科目は「音楽」であった。明治44（1911）年「高等女学校及実科高等女学校教授要目」を見ると、「音楽」の教授内容には基本練習（発声、音程、音階練習）、楽典、歌曲（単音、重音、複音唱歌）、楽器（オルガン、ピアノ、ヴァイオリン）が含まれていたことが分かる。しかし、授業に関しては、先行研究の蓄積が少ないのが現状である。

本発表では、明治期に東京市で開校した公立高等女学校3校を取り上げ、本科における音楽科教育の実際を多角的に検討することを試みる。対象とする学校は、以下の通りである。

東京府立第一高等女学校…明治22（1889）年開校、浅草区、現：東京都立白鷗高等学校

東京府立第二高等女学校…明治33（1900）年開校、小石川区、現：東京都立竹早高等学校

東京府立第三高等女学校…明治35（1902）年開校、麻布区、現：東京都立駒場高等学校

（以後、第一高女、第二高女、第三高女と表記）

手がかりとしたのは、学校や同窓会が発行した会誌や、卒業生の言説、新聞記事を中心とした文献資料が中心である。なお、第二高女に関しては、同窓会の協力を得て卒業生を対象にアンケート調査を実施した。依頼、配付した24名のうち、昭和11（1936）～21（1946）年に入学した13名から回答を得た。

3校の学科目課程、学習環境、教師、授業内容、方法を検討すると、各校及び教師の独自性が見出された。第一高女は、東京音楽学校研究科に在籍、卒業した教師が多い点、同時期に複数の教師が在籍していた点、研究会を開催していた点、楽器の指導が行われていた点で、先導的存在であったと考えられる。第三高女は、第一高女に倣い、西洋音楽の教育に力を入れていた。昭和10年代には、楽典や基本練習を重視する歌唱指導を行った玉井キミと、絶対音感教育を取り入れた橋内良枝が在籍し、合唱指導が行われていた。また、廊下の隅にはピアノが置かれ、いつでも誰とでも合唱ができる環境ができていた。第二高女は、東京府女子師範学校と敷地建物を共有しており、教師が兼任し、西洋音楽の作品を中心に歌唱の指導が行われていた。音楽会や練習室で、両校の生徒の交流も見られた。

本発表では、各校、各教師の独自性を明らかにしつつ、音楽科教育において目指したことは何だったのかを考察したいと考えている。

付記

本研究は科学研究費補助金（20K13880）の助成を受けたものである。

音楽科教員養成課程にしながら他教科の免許を取得したことの意味

広島大学大学院 院生・武島 千明
広島大学大学院 院生／日本学術振興会 特別研究員（DC1）・吉田純太郎
広島大学大学院 院生・嶋田 亘佑

教師がよりよい授業を計画・実践するためには、教科についての目的意識を形成・深化する必要がある。このような前提に立ち、教科教育の研究では、教師・教師志望学生を対象とした意識調査が行われてきた（例えば、岡島，2018；上田・磯崎，2016 など）。

音楽科も例外ではない。菅（2000）や瀧川・古山（2016）のように、「なぜ音楽を教えるのか」に関する意識を究明することを目指した研究が蓄積されている。

では、音楽科についての目的意識はどうすれば深められるか。発表者らは、他教科の教員免許取得に着目した。先行研究では、複数教科を比較する学習を設定すれば、教師志望学生が家庭科教育観を深められることが明らかにされている（例えば、詫間・鈴木，2023 など）。さらに、①数年来にわたって継続的に他教科を学べるため、②教科の内容や指導法が体系的に整理されたパッケージを学べるため、という理由から、他教科の教員免許取得は、音楽科についての目的意識の深化に効果的であるとの仮説を立てた。

はたして他教科の免許取得は、音楽科についての目的意識の深化にどのように寄与するか。本発表では、中等音楽科教員養成課程に所属しながらも、国語科教員免許を取得したA氏を事例に、他教科の学びと教科についての目的意識との関係について考察する。

※上田裕太・磯崎哲夫（2016）「理科教授の目的・目標についての信念の発達に関する研究」『学習システム研究』3，13-25.

岡島春恵（2018）「中学校社会科教員の教科観の形成に関する事例研究」『社会科研究』88，13-24.

菅裕（2000）「音楽教師の信念に関する研究」『日本教科教育学会誌』22（4），65-74.

瀧川淳・古山典子（2016）「質問紙調査を通して見る大学生の音楽教育観ならびに音楽教師像」『熊本大学教育学部紀要』65，155-161.

詫間千晴・鈴木明子（2023）「他教科との比較による教科観の深化を促す教員養成系大学院における授業の効果」『日本教科教育学会誌』46（1），27-37.

ペンタトニック音階を用いた 従来型の創作と音楽制作ソフトを用いた創作の比較検討

梶山女学園大学大学院生・浅井柚衣

梶山女学園大学研究生・山上京夏

梶山女学園大学学生・鈴木あいり

梶山女学園大学・山中文

近年、教育現場では、2019年に発表された文部科学省の「GIGAスクール構想」などにより児童生徒が一人一台のタブレット端末を持つことが珍しくなくなった。音楽科の創作分野の授業においても、音楽制作ソフトウェアなどの、音楽の基礎知識がなくとも豊富な音素材を用いて簡便に作曲できるシステムを用いた授業も散見されるようになってきた。一方、音楽制作ソフトを用いた創作は、教師側に操作の新しい知識が必要になってくる。

本研究では、そのような状況下で、児童生徒の創作に音楽制作ソフトの導入はどのような影響を与えるか、機械媒体に頼らない従来のアナログ的な創作（①）と音楽制作ソフトを用いたデジタル的な創作（②）を児童生徒自身が比較していけるような授業を考案し、検討をする。

今回の研究で用いたのは、音楽制作ソフトウェア（Ableton Live）とそれに連携できるPushである。Pushは、8×8のボタンがついているパッドで、触るだけで感覚的に作曲ができる媒体である。鍵盤と違い、スケールを設定できるので、ジャズや民謡のメロディーなどの旋律も容易に奏でられ、表現の幅が広がる。タッチによって、音の強弱が変わり、その場で即興的な表現を組み入れることができる。

先の①では、黒鍵の低い音を使った「ドローン」、同じようなメロディーを繰り返す「パターン」、自由に音を鳴らす「メロディ」、メロディを飾る「合いの手」のような「フィラ」の4つの役割による作品を創作する。②では、そのうち「ドローン」「パターン」「フィラ」の音源と「リズム」を事前に「Ableton Live」に数種類ずつ組み込んでおき、Pushのスケールをメジャーペンタトニックスケール変ト長調に設定しておく。授業では、組み込んでおいた「ドローン」「パターン」「フィラ」「リズム」の音源の組み合わせを児童生徒らに考えさせ、それに沿ってPushで自由にメロディを演奏することで、オリジナルの作品を創作させる。

広島大学におけるオペラ制作に携わる学習者の学びの拡大 ー教育現場でのアウトリーチコンサートの企画・演奏をとおしてー

広島大学・大野内 愛
伊藤 真
枝川 一也

筆者らはこれまで、プロジェクト学習としての広島大学でのオペラ制作に焦点をあて、定期オペラ公演に向けた学習者の学びのプロセスや、指導者の働きかけについて研究を進めてきた（大野内ら 2021, 2023）。オペラを制作する中で学習者は、どのように人と協力し、どのような道具を使って作業するかといった、オペラを完成させるための方法の模索にとどまらず、オペラ作品としてもっと完成度を上げたいというクオリティ追求の場面において、自発的な試行錯誤を行っていた。こうした学習者の学びを支えるものとして、指導者は「オペラを構成する様々な要素についての複合的な学びを促進する働きかけ」と「演奏や作品制作において恒常的に学習者自身の中で行われている思考に、さらに負荷をかける働きかけ」の2点を行っており、それらの働きかけの意図は、ある分野へのエキスパート的な学びと共に、全体を俯瞰できるようなオールラウンダーとしての学びを保証することであった。一方、こうした指導者の意図に反し、学習者にとってはエキスパートとしての学びが強調されているという課題を見とることができた。

学習者たちの一部は、依頼があれば定期オペラ公演以外にも、教育現場（幼稚園・小・中・高等学校など）でのアウトリーチコンサートを指導者とともに企画・演奏することがある。こうしたアウトリーチコンサートは、イベントとして行うのではなく、教育現場のカリキュラムに合うよう、当該校の音楽科教員と共に相談をしながら、コンサートの構成を考えるよう心がけている。音楽科教員とは、授業で扱っている内容や、その時の生徒たちの反応、さらに地域性などについて情報を共有する。ここでは学習者たちは、オペラを完成させることや、演奏のクオリティを上げる以外に、発達段階に応じて生徒たちの興味を高め、深い学びにつながる工夫について試行錯誤していかなければならない。

本研究では、こうした教育現場でのアウトリーチコンサートへの取り組みによる学びと、通常の定期オペラ公演での学びとの共通点、相違点を学生の語りから明らかにする。

《参考文献》

- 大野内愛・伊藤真・枝川一也・樋口史都（2021）「学習者の語りからみるオペラ制作の試行錯誤ーCOVID-19パンデミック下での活動に着目してー」『音楽学習研究』17巻，pp.1-12
- 大野内愛・伊藤真・枝川一也（2023）「プロジェクト型学習としての広島大学のオペラ制作ーオペラ「魔笛」の制作における指導者の働きかけに着目してー」『音楽文化教育学研究紀要』35号，pp.3-10

小学校の音楽クラブにおける楽曲選択に関わるネットワークの考察

新潟大学・工藤千晶

小学校における「特別活動」のひとつに「クラブ活動」があげられる。クラブの種類は、小学校によって様々なものがみられるが、本研究では音楽活動を行うクラブ（以下「音楽クラブ」と記す）に着目する。音楽クラブの活動は、教科としての目標や内容が示されている音楽科の授業に比べ、教員や児童の意思に基づき自由に展開することが可能なように思われる。またクラブは、児童が自身の興味・関心に基づき選択するため、音楽クラブにおいては音楽科の授業よりも音楽活動に意欲的な児童の割合が多いことも推測される。

以上のことが想定される音楽クラブであるが、実際、どのように活動が展開されているのか。このことについて、本研究では、教員・児童・楽曲・楽器・楽譜など音楽クラブを構成する「人」および「モノ」の相互作用に基づくネットワークを視点とした考察を試みる。具体的には、小学校の音楽クラブにおける楽曲選択に関わる場面を事例として取り上げ、音楽クラブの活動が「人」および「モノ」のネットワークによって規定されていく様子を記述する。

理論的枠組みとしては、カロン (M. Callon)、ラトゥール (B. Latour)、ロー (J. Law) らが提唱したアクターネットワーク理論 (Actor-Network-Theory) を援用する。アクターネットワーク理論では、「人」と「モノ」を対称に位置づけ、その相互作用をネットワークとして可視化する。

本研究では、「人」および「モノ」のネットワークを視点として音楽クラブの楽曲選択に関わる場面を検討することを通して、音楽クラブが有する柔軟性とその限界に言及したい。結論としては、音楽科の授業とは性質が異なり比較的自由に展開できるはずの音楽クラブにおいても、ネットワークの構造上、音楽科の授業に共通する制限がかかっていること仮説的に提示する。

付記

本研究は、JSPS科研費 (21K13595) の助成を受けている。

小学校音楽科授業におけるアウトリーチのあり方 ー教員と演奏者の協働に着目してー

広島大学大学院性・平幸音

近年の学校教育では、術鑑賞会など、演奏家が学校をフィールドとして行うアウトリーチが普及している。その一方で、課題もいくつか明らかになっている。林（2013）は「文化施設や芸術団体など提供側の視点でアウトリーチが実施される傾向が強かった」（p.11）ことを述べており、また上村・小野（2021）も「「行事」としての意味はあるものの、音楽科の「授業」として捉えていない」（p.15）ことを課題としている。坪能ら（2019）は、こういった課題を改善する、学校と社会を結ぶ音楽教育のあり方として、TASモデルを提案している。TASとは、「授業者のT（Teacher）、授業者に音楽上の情報を提供するA（Adviser）としての音楽研究者や作曲家、そして子どもたちのつくり出す音楽を自らの音によって支えるS（Supporter）としての演奏家の3つの役割を明確化」（p.57）したものである。そこで本研究では、音楽科授業のカリキュラムと結びついたアウトリーチの実践を通して、まずは、学校と外部の演奏者の協働のあり方について検討する。

本研究では、県内のA小学校にて2022年12月から2023年3月にかけて第3学年20名を対象として調査を行う。授業の進行は担任が担当し、演奏者は筆者を含む広島大学・同大学院の学生とする。

本研究の実践の流れは、まず、対象のクラスの担任とA小学校校長、筆者の3人でアウトリーチを取り入れる題材を検討・決定する。その後、担任がアウトリーチを取り入れた授業の指導案を作成し、筆者と演奏者で指導案を検討する。それをもとに、担任と筆者で、授業の打ち合わせ及び児童の様子を共有し、授業を行う。

本研究では、教員と演奏者でどのように協働してアウトリーチを作っていくのかを明らかにするために、担任と筆者の会話の逐語録を取る。また、授業の様子は前後から録画・録音を行い、授業後は児童を対象とした自由記述式のアンケート調査と担任を対象とした聞き取り調査を行う。これらのデータを分析しながら、教員と演奏者との協働のあり方について検討を行う。

【引用・参考文献】

- 上村有平・小野隆洋（2021）「アウトリーチが子どもに及ぼす効果—感想文の分析から—」『山口芸術短期大学研究紀要』第53巻，pp.15-27
- 坪能由紀子・石上則子・小野沢美明子・今田匡彦・駒久美子・中村昭彦・味府美香（2019）「学校と社会を結ぶ音楽教育II—協働的な授業のフレームワークを構築する—」『音楽教育学』第48巻第2号，pp.57-64
- 林陸（2013）「音楽教育におけるアウトリーチを考える—基本的な考え方，歴史的経緯，最近の動向」『音楽教育実践ジャーナル』第10巻第2号，pp.6-13

大陸間 SDGs 教育プロジェクト「地球こども広場」における協働を促す音楽活動

梶山女学園大学教育学部 ・ 渡邊康

大陸間 SDGs 教育プロジェクトは、2008 年に梶山女学園大学附属小学校によるブルキナファッソに机といすを贈る活動に始まった。そこからフランス・ブルキナファッソ・日本の生徒による水と環境問題の学習へと発展した。水問題・環境問題についての学びを文字や映像で発表するだけではなく、ことばのハードルを越えたツールとしての音楽として表現していくことも重視してきた。その成果が、2015 年 11 月 7 日の東海ブロック国際理解教育研究大会（会場：梶山女学園大学）における日本、ブルキナファッソ、フランスの 3 か国の小学校の子どもたちによる合唱として結実した。「I Love Water」（渡邊康作曲）の共通のメロディーにそれぞれのお国柄の水問題の意識を反映した歌詞をつけて歌った。名古屋市立蓬来小学校の子どもたちが会場で、フランスとブルキナファッソの子どもたちは、映像で合唱を紹介した。それが翌年のミュージカル制作と発表へと発展した。ミュージカルでは三か国の子どもがお互いの国の曲をその言葉で歌い、さらにエンディングでは「I Love Water」を日本語で歌った。2019 年 3 月に、パリ地球子ども広場（Global Kids Square in PARIS）公演をパリ日本文化会館で実施し、その会場で新曲「We Love The Earth」を 3 か国の子どもたちが合唱し、「パリ子ども宣言」を創った。昨年度からはフィリピンの参加を得ておもにゴミの山としてしられるスモークマウンテンにおける環境問題に取り組んでいるマガット・サラマット小学校、ダト・ロンピピ小中学校と協働している。そこでの「I Love Water」の発表会がフィリピンにて 6 月に開催された。それぞれの編曲や歌唱にはその国に特化した詞の内容、楽器編成、リズムの特徴があり興味深い。そして協働として、環境問題学習へのコミットとしての音楽の教育的な価値を見出だすことができるであろう。

教員養成課程における協調学習志向のピアノ実践への展開

—初学者段階の基礎技能習得プロセスと課題の検討—

柴田学園大学・一戸 智之

令和の日本型学校教育は、個別最適な学びと協働的な学びを実現するための方向性を示しており（令和3年答申）、この試みは、従来の教育の枠組みを超えて日本の教育体系と理念を新たな時代の要請に合致させて再構築しようとするものである。これからの時代に求められるのは、個々の能力や多様性を適切に認識し、社会的な共生と公正な機会を提供するための教育である。この先進的な取り組みは、個人の成長と社会的貢献を促し、多様な背景や才能を最大限に活用することを目指すと同時に、個人の価値観や倫理的な価値を培い、社会的な責任や共同体の意識を養うことも重要視されている。よって、令和の日本型学校教育の根幹には、多様性や包摂性、共同性、自己表現、創造性などの価値が存在しているといえる。これらの価値は、社会の変化やグローバルな環境の中で生きる個人のニーズや要求に対応するために重要であり、学校教育は個別の学習者の個性や能力を最大限に伸ばすだけでなく、共同体の一員としての役割や責任を育む場としての役割も果たすことが求められる。そのためには、協調学習というアプローチが有効であるとされている。協調学習は、知識の構築や学習が社会的相互作用の中で行われるという考え方に基づいており、この教育手法では、グループ内での相互作用や意見交換を通じて、知識の醸成や問題解決能力の向上、コミュニケーションスキルの発展などが促進されることが示されている。共同で学ぶ環境を提供することで、持続的な学習成果や社会的な力の育成に貢献することが期待される。言い換えれば、協調学習は、学習者の個別性の尊重や社会的な共生の実現、持続可能な社会の形成など、多くの価値を生み出す可能性を秘めている。

ピアノ実技指導では、従来は個別レッスンが主流であり、教師が学習者に専門技能を伝授することが基本的なアプローチとされてきた。この方法では、教師が課題や改善点を指摘し、学習者の個々の課題やつまづきに対応しやすいという利点がある。しかし、教師の指導力や音楽性に大きく依存し、一方向の学習や孤立した学習になってしまう傾向にある。協調学習を組み入れることにより、個人の努力に加えて他者からの刺激による学習の動機付け、アンサンブルを通じた自己学習への意欲の高まり、ディスカッションによる理解の深化、異なる学習アプローチへの気づきなどの効果が期待される。すなわち、他者との関わりや共同作業から豊かさが生まれ、思いやりや共同体としてのグループへの貢献意識、相互依存性が育まれる可能性がある。加えて、教員養成課程は芸術系大学とは異なるため、ピアノ実技指導においては技能の習得と同時に教育者としての養成も必要である。したがって、教員養成の視座から協調学習を促進する方法や適切なテキストの開発についても検討することが望ましいと考えられる。

本研究では、個別学習を前提として設計され、普及が広汎に及んでいる「全訳バイエルピアノ教則本（全音楽譜出版社）」を使用し、基礎技能習得プロセスの分析を通じて、学習者の練習傾向について明らかにすることを主眼とする。今後の展開として、この分析をふまえ、協調学習志向に合致したピアノテキストの適切な形態や内容についても考察することが意図されている。

【付記】本研究は JSPS 科研費 JP22K02920 の助成を受けたものである。

視線情報と打鍵情報から分析する大学生の演奏ミスについて ーピアノ演奏における高齢者との比較ー

京都ノートルダム女子大学 古庵晶子
公立はこだて未来大学 竹川佳成
公立はこだて未来大学大学院生 能登 楓

高齢ピアノ学習初心者の殆どが「演奏が止まる」ミスをしないうで弾き通すことが出来ない傾向であることから、発表者らは「止まる」ことを中心に高齢者の演奏ミスについて分析してきた。実験方法は、対象者のピアノ演奏ミスの個所における楽譜-鍵盤間の視線移動の状況を、3台のビデオカメラとアイトラッカーで撮影して分析するものである。対象者らは60歳前後でピアノ学習を開始あるいは再開した学習歴1年～10数年の高齢者5名で、60歳後半～80歳前半である。分析の結果、演奏ミスの理由として①音符や鍵盤を一つずつ確認しながら弾く、②同じ音符を何度も確認して時間がかかる、③一度弾いた音符を再度見ってしまう、⑤先読みのタイミングが合わずに混乱する、⑥楽譜のどこを弾いているのかわからなくなる、⑦タイの表記がミスを誘発する、⑧段の変わり目はうまく視線移動できない、⑨指替えでのミスは読み間違いの可能性が高い、⑩指番号が細かすぎると混乱する、⑪順次進行やナチュラルポジションの音程で鍵盤を目視する、という状況が見られた（古庵、竹川、能登、三上2023）。

しかし似たような状況は若年成人にもみられることから、高齢者の特質とは言い難い。そのため比較対象として21歳～23歳の学生で学習歴5年～13年の学生7名にも同様の実験を行った。その結果学生の演奏の大きな特徴は、「音符をまとめて先読みしてから鍵盤もまとめて見る頻度が高い」「視線が泳ぐことはあまりない」そして「鍵盤をまとめて見ないのはブラインドタッチが出来ているから」という3点であった。いくつかの音符をまとめて見ることを「周辺視」、ひとつの音符に集中して見ることを「固視」と呼ぶが、高齢者の①～⑪の演奏ミスの傾向と照合したところ、高齢者よりも大学生のほうが周辺視出来ているといえた。そして周辺視が出来ているということが、まとまりのある演奏に繋がっていたと言える。ただし、指定された運指に迷う頻度は高齢者とさほど変わらないように見えた。そしてあらかじめ止まることが想定された箇所は、やはり大学生でも止まっていた。

比較対象であるこの7名のうち5名は全般的に高齢者よりも学習曲のレベルが高かったので、大学入学時に初心者（自己申告）で、実験時に経験が1年程度の4名を含む6名の学生たちにも追加調査を行った。その結果、高齢者の①～⑪の演奏ミスすべてではないが、混乱して演奏途中で音価を長く延ばす、固視しながら弾いて周辺視があまり出来ていないなど、動画を一見しただけでも高齢者と似た点がみられると同時に、学生にはみられない点もあった。今回の発表では、先の学生7名を含めた全学生についてのミスの分析結果のうちの一部を取り上げ、高齢者との比較を改めて行うこととする。

※本研究は、JSPS科研費（課題番号19K02464および23K02149）による助成を受けている。

即興表現を促す幼児の音楽活動のプロセス

就実大学・小林佐知子

幼児期の表現は、『幼稚園教育要領解説』(2018)に「幼児は、感じたり、考えたりしたことをそのまま率直に表現することが多い」(p. 238)と示されている通り、「即興」が特徴のひとつである。即興は幼児期の表現にとって重要な概念であるが、人によって捉え方に違いのある概念でもある。一般に、即興には、あらかじめ準備することなく、その場で思いのままにつくり出すという意味がある。このうち「あらかじめ準備することなく」の部分を重視して、即興はまったくの「無」から突如なされるものと捉え、特に指導をすることなく幼児から自然に出てくるのを待つべきという考えがある。他方、古くから存在する学習法である模倣の意義から、幼児の即興に先立って、その拠り所となるモデルの提示が必要という考えもある。

これまで筆者は、幼児がわらべうたを作り替えていく表現活動に注目した研究実践を行ってきた。研究成果を発表する度に、「即興」の捉え方は人によって違いがあるため、理論を背景に用語を規定した上で研究を進めていく必要を感じてきた。そして、人との関わりの中で生活している幼児の実態から、即興はまったくの「無」からなされるというより、身近な環境をモデルにして幼児が自由に発想した結果ではないかと考えるようになった。そうであれば、幼児が音や音楽を素材に即興表現するとき、その拠り所となる音楽活動はどのようなものかという問題意識をもった。

以上より、本研究では、音楽発達に関する諸理論から幼児の表現における「即興」の位置づけを整理した上で、幼児の即興には拠り所が必要という立場から、事例分析を通して即興表現を促す音楽活動のプロセスを明らかにすることを目的とする。

研究の方法は、まず、20世紀に世界的に普及した音楽教育メソッド(ダルクローズ、オルフ、コダーイ)と、近年、北米の幼稚園や小学校を中心に普及している音楽学習理論(ゴードン)から、幼児の音楽発達のプロセスを検討し、そこでの「即興」の位置づけを整理する。次に、幼児の即興表現の拠り所となる音楽活動を検討し、音楽活動から即興表現への連続性に着目した研究実践を行う。最後に、研究実践における事例分析を通して、幼児の即興表現を促す音楽活動のプロセスを明らかにし、幼児の音楽活動と即興表現とのつながりについて考察する。

幼児の音楽発達に関する理論を概観した結果、すべてのメソッド・理論において、幼児の音楽発達を促すプロセスに「即興」が位置づけられており、即興に先立つモデルが存在していた。そして、いずれも音楽を単独で扱うのではなく、音楽を身体の動きやことばと関連させて扱っていた。

これらの結果から示唆を得て、幼児が「音の高低」と「リズム」を意識する音楽活動を拠り所にして、「音の高低」と「リズム」を材料に即興表現するというプロセスを計画し研究実践を行った。具体的には、①《なべなべ》を歌って遊ぶ→②音の高い・低いを感じて遊ぶ→③《あんたがたどこさ》を歌って遊ぶ→④身近なことばのリズムで遊ぶ→⑤自分のお気に入りのものについてリズムをつくったり歌ったりして遊ぶ、というプロセスである。なお、本研究の参加者は、5歳児の2クラスの幼児(計37人)と担任教員で、本研究は筆者の所属先の研究倫理委員会によって承認されている。

保育者養成におけるリトミック指導の内容

－理論と実践の配分に着目して－

茨城キリスト教大学・佐藤真紀

近年保育に関わる現場では、リトミック（Rythmique [仏] Eurhythmics [英]）という用語が認知され、その使用が顕著である。例えば、リトミックを行っていることを特色に掲げて宣伝し、運営する私立の幼稚園や認定子ども園がある。また一部の保育士養成施設では、特定の授業単位を修得することでリトミック指導者としての民間資格を与える仕組みを作り、他との差別化を図っている。リトミックという用語を介して独自性や付加価値があることが示されているが、多くの場面においてリトミックという用語は何か高い有益をもたらすニュアンスで使われている。

リトミックは、1900年初頭にスイスの作曲家・音楽教育者であったエミール・ジャック＝ダルクローズ（Emile, Jaques=Dalcroze, 1865-1950）によって創案され、この言葉には「優しい流れ」や「良いかたち」という意味が含まれる。日本では演劇界でリトミック導入の動きがあり、その後日本音楽教育界や幼児音楽教育界へ導入されていった¹⁾。100年以上の歴史をもつ用語であり、スイスのジュネーヴに本部を置く国際リトミック指導者連盟があり、日本にもその認定支部として「日本ジャック＝ダルクローズ協会」がある。また今年で創立50周年を迎える「日本ダルクローズ音楽教育学会」もあり、重要視されるべきものであることに間違いはないといえよう。

しかしながら、リトミックが価値あるものという認識が定着する一方で、それを実践する専門家の育成状況はあまり知られていない。民間の認定資格もいくつか存在するが認定方法には大きな差があり、保育士資格のような国家資格の整備がなされていない中、何をもってリトミックの専門家、指導者といえるのか判然としないところがある。ただし、資格の有無はさておき、幼児教育の場で活躍できるリトミック指導者を速成しようとするならば、保育者養成の段階で行うことが最も効率的であることは明らかである。

そこで本発表では、保育士養成施設においてリトミックに関わる授業がどの程度行われているのかを調査し、指導者育成の状況を捉えていく。具体的には、一般に公開されている授業シラバスや、リトミック指導の実践を報告した論文などを手掛かりにして調査を行う。特に理論的内容と実践的内容の関連や展開方法に注視する。

結果、6つの保育士養成施設²⁾を調べると、リトミック指導者の民間資格が付与されるかどうかで授業内容がより専門的になる、リトミックを理論的に深く学ぶような講義形式の授業は行われていない、演習形式の授業で理論的内容は単発的に行われる、リトミックを体験することを中心とする授業が多い、実践方法を考案する授業もあるがグループで行う、など明らかとなった。論文調査からは、授業内容がより詳らかになったものの、保育士養成施設の授業内で即戦力となり得る指導者育成まで行う難しさが浮き彫りになった。

¹⁾ 神原雅之（2014）「幼児と音楽－リトミックに関する研究動向を中心に－」音楽教育学44-1.

²⁾ https://www.hoyokyo.or.jp/files/hoiku_youseikou.pdf 指定保育士養成施設一覧（令和4年4月1日時点）参照。シラバスが非公開の施設は調査対象から外した。

保育者養成校に於ける「弾き歌い」に重点化した指導に関する一考察 —自作テキストを使った授業での実践に基づいて—

千葉敬愛短期大学・股木裕美子

近年、多くの保育者養成校が直面している問題の一つとして、ピアノ経験の無い学生や音楽経験の少ない学生の入学が増加の一途を辿っている事が挙げられる。筆者の勤務校は保育に特化する短期大学であり、2年間の学びの中、学生が2年生に進級した3カ月目にあたる6月に幼稚園実習が組まれている為、1年間2か月ほどで、実際に保育現場に出て「子どもの歌」のピアノ伴奏に対応できる力を体得しなければいけない。上述したような学生にとっては、実質的に育成期間が充分とは言えない。

筆者の勤務校に於いては長年、学生のピアノ習得を目的とする授業は、1年目はバイエル、ブルグミュラー、ソナチネ等のピアノ教則本やピアノの楽曲を軸にした授業が展開され、保育の現場で日常的に使用されている「子どもの歌」の課題は、前期で2曲、後期で5曲に留まっていた。その状況に鑑みて、学生が入学してから如何に最短最速で、実際に保育の現場で歌われている「子どもの歌」の弾き歌いを1曲でも多く習得させるかが最も重要な課題だと考えるに至り、今春から多角的なアプローチによる弾き歌いの技術を学生に習得させる【子どもと音楽】と名付けられた授業が始まり、その授業で使用する新しいテキスト『実践。弾き歌いのためのピアノ教本』の作成を筆者が担当した。

新しいテキストの大きな5つの特徴は、①ピアノ初心者が段階的に一歩ずつ学べるように、フェーズ1からフェーズ7まで進度を分けた、②新しく学ぶ内容には必ず予備練習やエチュードを入れた、③早い段階から3コードを学び、コードに親しみながら上達するように工夫した、④新しいリズムには言葉を当てはめて体感させる工夫をした、⑤子どもの歌で取り上げられているハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調に限定した、である。

今年4月から新しいカリキュラムに則り本テキストを使用し、7月下旬に前期の授業を終えた。授業はレベル別にAグループからDグループの4つに分け、全グループ共通の「コアの課題曲」1曲を毎授業必修にし、課題曲の範囲を決め、曲を進ませる進度については各グループの担当教員の判断に委ねられた。実技試験は中間試験、期末試験と2回行い、楽典の試験は期末に1回実施し、前期授業を終えた結果、学生達が楽しんで「子どもの歌」の弾き歌いに積極的に取り組む姿が見受けられ、前期終了時には殆どの学生がハ長調3コードに慣れ親しむという結果を得た。学会登壇時には結果を詳細に伝えると共に、授業での進度、様子、2回の実技試験、毎回授業後の振り返りシートに基づき考察する。

手指に不具合がある成人のピアノ学習

—より有効な練習法の開発のために—

大人のピアノ研究会・三上香子

本発表は、成人のピアノ学習者を対象に手指の不具合について実施したアンケート調査の結果報告である。

新型コロナウイルスの5類感染症の移行にともない、筆者が担当する大阪市内のカルチャーセンターでのピアノ講座にも新規入会者がみられるようになった。

そのようななかで、筆者はかねてから指に変形がある成人学習者の存在を懸念していた。かれらは練習を重ねても速いパッセージが演奏できなかつたり、十分な手の大きさがあるにもかかわらず1オクターブが届かなかつたりするからである。そのため思うような演奏に仕上がらず、満足感や達成感を得にくいのではないかと思われた。

そこで手指の不具合の実態を知るために、ピアノ講座の成人学習者69名（女性66名、男性3名）に対し、手指の不具合に関するアンケート調査を実施した。その結果、約3分の1の23名に手指の不具合が報告された。内訳は、怪我の後遺症や神経系の疾病による手指の動きにくさが3名、免疫系の疾患による腕全体のしびれが2名、指の変形が18名である。また、指の変形のうち医療機関を受診した者の診断名は、ヘバーデン結節、ブシャール結節、親指CM関節症、ばね指だった。さらにかれらの多くは、ピアノ学習を開始する以前にすでに指の変形があった。また、「指の変形は加齢が原因である。治らない」と述べたが、一方では、ピアノ学習が症状の緩和に効果的であると考えていることがあきらかにされた。だが、これについては医学的な根拠は認められなかった。

なお、演奏家の手の障害については、酒井直隆が、東京女子医科大学整形外科内に音楽家外来を設置して積極的な治療にあたっている。そこで筆者は、知人の看護大学講師の協力のもと医学的な視点から手指の不具合に関する考察を深め、いずれはストレッチを通じてアマチュアの成人ピアノ学習者の手指の不具合を少しでも緩和し、満足感や達成感を得ることができる練習法を構築したいと考えている。